

つばさかかんのんれいげんき  
**壺坂観音霊験記**

〔解説〕

福池桜痴（一説には伊東椿増）が作ったと言われる浄瑠璃に、二世豊澤団平の妻千賀が加筆してできた明治新作浄瑠璃の一つ。団平が作曲し明治十二年十月、大阪大江橋で六世豊竹島太夫が最初に語り、その後、作曲者自身が曲を改めて、明治二十年稻荷彦六座で三世大隅太夫と上演しました。翌二十一年には歌舞伎化もされ、以来、これを上演すれば必ず大入りになるといわれるほどの人気曲となりました。

盲目の座頭の沢市と、彼に献身的につくす妻、お里の夫婦愛の物語。「三つ違いの兄さんと…」という、お里のくどきは有名。ちなみに奈良の壺阪寺もこの浄瑠璃の評判に伴い、辺鄙な場所にもかかわらず、遠方からの参詣人が集まるようになったといえます。

〔あらすじ〕

〈沢市内の段〉

座頭の沢市は、洗濯物や賃仕事をして生活を助ける妻のお里と、壺阪寺のほitori、土佐町に細々と暮らしてい

ました。沢市は子どもの頃に疱瘡から盲目となり、そのひがみから、三年の間、毎夜七つ過ぎに家にいたことがないと、お里の行動を疑い続けています。ところがお里は、沢市の目を治したい一念で、その昔、桓武天皇の眼病がここに立願して平癒したことから、眼病には靈験のあるという壺坂の觀世音に三年越しの祈願をしていたのです。それを知った沢市は自分も参籠しようと、夫婦そろって寺に向かいます。

### 〈壺坂寺の段〉

夫婦は壺坂寺に辿り着き、沢市は三日間断食をするため、お里を家に帰しますが、一人になると、治る見込みのない祈願をするよりも死んでしまった方が、お里に苦勞をかけずにすむと思ひ、谷底に身を投げてしまいます。再び山へもどったお里は、沢市の姿がないので探すうち、谷底に死骸を見つけ、死後も盲目の沢市の手引きをしてやらねばと思ひ、夫のあとを追います。そこに觀世音があらわれ、妻の貞節と日ごろの信仰心により、二人の命を助け、沢市の目を開けるのでした。

(一般社団法人 義太夫協会発行)

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

## 壺坂寺の段

辿り行く

伝え聞く壺坂の觀世音は人皇にんのう五十代、桓武天皇奈良

の都にまします時、御眼病甚しくこの壺坂の尊像へ、

時の方丈道喜上人いっぴやくまぬか一百七日の御祈禱にて、たちまち

平癒あらせられ、今に至つて西国の、六番の札所と

はみな人々の知るところ、げにありがたき靈地なり。

折しも坂の下よりも詠歌を、道の葉にて、沢市夫婦

やう／＼と御寺間近く詣で来て

「コレ沢市様。信心は大事なれど、病ひは気からと

いふからは、お前のやうにしを／＼と、ふさいでば

かりゐやんと、なほ病ひは重ならう。コレこんな

時にはわつさりと、日頃覚えの唄なりと、気晴らし

に歌はんしたらどうぢやの」

「ム、ほんにさうぢやの。わが身の云やるとほり、

くよ／＼思ふは目の毒ぢや。そんならあの浚さらへと思

ふてやつて退けう。しかし、誰も見てゐやせぬかや。

エ、ままよ。てんぼの皮やつて退けう。エヘンエヘ

ン、憂きが情けか情けが憂きか、チンツンチンツ

チンツ、露と消えゆくテチン、わが身の上はチン

／＼／＼チリンツツテチリツテントンシヤン、アイ

タ、／＼、アしもた。今躓いて、あとの合いの手み

な忘れてしもた。アハ、／＼、／＼」

「ホ、／＼、／＼」

と唄をしばしの道草に、御本堂へと登り来て

「サア／＼沢市様。ソレ觀音様へ来たはいな」

「ハアモウここが觀音様か。ヤレ／＼ありがたやあ

りがたや。ハア、南無阿弥陀仏／＼／＼」

「コレ／＼こちの人、今宵こそゆつくりと、御詠歌

を夜もすがら、上げませうではあるまいか」

と夫婦して、唱ふる詠歌の声澄みて、いとしん／＼と殊勝なる

「岩を建て、水をたたへて壺坂の、庭の砂も浄土なるらん。コレお里。叶はぬこととは思へども、そなたの詞に従ふて、来ごとは来てもなかく／＼に、この目は治りさうなことはないいなう」

「エ、この人はいなう。またしても／＼そんなこと。

この壺坂の観音様、昔桓武天皇様、奈良の都にまします時、御眼病にて御悩み、それ故にこの観音様へ御立願なされた時、早速御眼が明いたげな。それ故お前に勧めるもハテモウ天子様ぢやといふたとて、喩え虫けらの様な我々でもあなたに隔てはないいな。モとかく信心といふものは、気を長う歩み運んで、心を鎮め一心に、お継り申せばなに事も叶へ

てやるとの御慈悲ぢやはいなう。モそんなこと云ふ手間で、はやうお唱へ申しましたよ」

と力を付くれば

「いかさまなう。ほんに云やればそのとほり、そんならわしは今宵から、三日の間、ここに断食するほどに、そなたははやううちへ去んで、なにかの用事仕舞うておぢや。治るとも、治らぬとも、この三日の間が運定め」

「オ、よう云ふて下さんした。そんなら私もうちへ帰り、なにかの用事片付けてすぐに来ませう。ガコレ沢市様。このお山は嶮しい山路、ことに坂を登りて右へ行けば、幾何丈とも知れぬ谷間ぢやほどに、コレ構へてどつこへも」

「オ、どこかへ行かうぞ。今夜から観音様と、首引きぢや。アハ、ハ、ハ」

「ホ、ホ、ホ、」

と笑ひながらに女房が跡に心は置く露の、散りては  
かなき別れとも知らずとつかは急ぎ行く。跡に沢市  
ただ一人、こらへし胸の遺瀬やるせなくかつぱと伏して泣  
きみたる。

「コレ嬉しいぞや女房ども。この年月の介抱その上  
に、貧苦にせまるも厭ひなく、ただの一度も愛想つ  
かさずあまつさへ、目かいの見えぬこの身をば、大  
事にかけてたもる志。それとも知らずにいろいろの  
疑ひだて。コレ堪忍してたも〜。今別れてはいつ  
の世に、また逢ふことのあるべきか。不憫の者やい  
ぢらしや」

と大地にどうと身を打伏し前後、不覚に歎きしが、  
やう〜に顔を上げ

「ア、歎くまい〜。三歳が間女房が、信心凝らし

て願ふても、なんの利益もないものを、いつまで生

きても詮ないこの身。世の諺にも云ふとほり、退け  
ば長者が二人の譬へ、わしが死ぬのがそなたへ返礼。  
生き存へていづれへなりと、よき縁付きをしたも  
や。ヤ、ム、ム、最前聞へば坂を登りて右へ行けば、

幾何丈とも知れぬ谷間とのこと。これ究竟くつきょうの最後所。  
かかる靈地の土とならば、未来は助かることもあら  
ん。ム、幸ひに夜は更けたり。人なきうちに、オ、  
さうぢや〜」

と、立上り、乱るゝ心取直し、上る段さへ四つ五つ、  
はや更けわたる鐘の声

「イザ最後時急がん」

と杖を力に盲目の探り探りてやう〜とこなたの、  
岩にかけ上れば、いと物凄き谷水の、流れの音もど  
うどうと、響くは弥陀の迎ひぞと、杖を傍へにつき

立て、

「南無阿弥陀仏」

と、もろともに、がばと飛込む身の果ては哀れなりける次第なり。かかることも露知らず、息せき道より女房が取つて返すも気はそぞろ、常に馴れにし山道も、滑り落つやら転ぶやら、やうく登る坂の上

「ヤア、コリヤコレこちの人が見えぬはいな。沢市様沢市様、沢市様いなうく」

と尋ね廻れど声だにも、人影さへも見えざれば、あなたへうろくこなたへ走り

「沢市様いなうく」

とここかしこ木の間を洩るゝ月影に透せばなにか物ありと、立寄り見れば覚えの杖。『ハッ』と驚き遙かなる、谷を見やれば照る月の、光に分つ夫の死骸

「ハアこりやマアどうせう悲しや」

と狂気のごとく身を悶え、飛び降りんにも翅つばさなく呼べど叫べどその甲斐も、答ふるものは山彦の研よりほかなかりける。

「エ、こちの人間こえませぬく。聞こえませぬはいな。この年月の艱難も、厭はぬ私が辛抱はな、たゞ一筋に観音様へ願込めて、どうぞはやう眼の明きますやう、お助けなされて下されと、祈らぬ間とてもないものを、けふに限つてこのしだら。跡に残つてわたしやマアどうなるぞいな、どうせうく、どうせうぞいな。ア、これを思へば最後に、歌はしやんしたアノ唄は、どうやら心にかゝつたが、今に思へばその時に、死ぬる覚悟であつたのか。エ、知らなんだく。かういふことならなんのマア、お前を無理に連れて来ませう。堪忍して下さいせくエ、。

ほんに思へばこの身ほどはかない者があるかいな。

二世と契りしわが夫に永い別れとなることは、神ならぬ身の浅ましや。かかる憂き目は前の世の、報ひか罪かエ、情けなや。この世も見えぬ盲目の闇より、闇の死出の旅。誰が手引きをしてくれう迷はしやるのを見るやうで、いとしいはいの」

と、かき口説き、口説きたて／＼歎く涙は、壺坂の谷間の水や増るらん。やう／＼涙の顔を上げ

「ア、悔やむまい歎くまい。みななに事も前の世の、定りごとと諦めて、夫とともに死出の旅。急ぐは形見のこの杖を、渡すはこの世を去りてゆく、行先導き給へや南無阿弥陀仏」

弥陀仏の、声もろともに谷間へ、落ちてはかなき身の最後、貞女のほどこそ哀れなり。頃は如月、中空なかぞらや、はや明け近き雲間よりさつと輝く光明につれて、

聞ゆる音楽の音も妙なるその中に、いとも気高き上藹の姿を仮に観世音。微妙の御声うるはしく

「いかに沢市承れ。汝前世の業により盲目となつたり。しかも兩人ながら、今日に迫る命なれども、妻の貞心または、日頃念ずる功德にて、寿命を延ばし与ふべし。この上はいよ／＼信心かっごう渴仰して、三十三所を順礼なし、仏恩報謝なし奉れ。コリヤお里／＼沢市／＼」

と宣ふ御声もろともに、かき消すごとく失せ給へばはや晨朝しんちやうの鐘の声四方に響きて明け行く空、ほのぼの暗き谷間には、夢とも分かぬ二人とも、むつくと起きて

「ヤこなたは沢市つあん。ア、コレこちの人。お前の眼が明いてあるがな」

「エ、アノ、ほんにコリヤ眼が明いてある。オ、

